



2018.11
vol.212



you can do it too... 学校長 飯山 等

小学生のころ放課後の校庭でよくドッジボールをしました。ドッジdodgeとは「さっと身をかわす」「すばやく避ける」という意味。中高生ともなれば、もはや遊びというよりは競技と言ったほうがふさわしいスピードと激しさです。ボールを相手めがけてぶつけ合い、そのボールを巧みにかわす。とてもエキサイティングです。それと対照的なのがキャッチボール。相手のかまえる胸元のグラブに、受け止めやすいように投げる。球がそれたらグラブを伸ばして受け取ろうとする。拾いに走って相手のかまえたグラブめがけて投げ返す。そこにはエキサイトはないかもしれない。でも、グラブに入るボールの感触を心地よく感じ、互いの気持ちを感じ合う。気持ちも身体も温かくなる。

その想いは私の原点へと向かいます。憶えば、キャッチボールが私を成長させてくれた。私を育み、私に言葉の世界を開いてくれた。私がまだこの世界に生まれ出るその以前から、まだ言葉を持たない胎内の私に、優しくかけられ続けた声があった。そして誕生。未だ言葉のない私に、それは懐かしい響きを伴って呼びかけ続けられた。たとえ私が受け取り損ねても、決してとがめることなく、もう一度やわらかく言葉は私に差し出された。今度はしっかりと受けとめられるように、と。幾度も、幾度も……。そうして私たちは、今の私になることができた。私への慈しみに満ちたキャッチボールの世界があった。そして、そこにはいつもキャッチボールを愛する私があった。そして思います。それは決して過

去の事実として完了したのではなく、現在も、そして未来に向かってずっとこれからも、いのちの大地を形成する真実なのだ。

生きてゆくことの難しさが指摘され、個のスキルの向上が強い言葉となって社会に喧伝される現代、それは一方で個を孤に分断する力として作用しています。そのような時だからこそ、自らを大きな流れの中で感じて、自他共に生きている意味を身に深く受容する。『苦海浄土』の著者石牟礼道子さんは言います。「近代化された標準語では他人、他者ですが、私が生まれた天草では『人さま』と言います。人さまを大切に、隣人を大事にする、ゆきずりの人であっても縁を感じて大事にする」と。

朝日新聞(2018/8/3)の「折々のことば」欄に、ヴァージル・アブローの「you can do it too...」の言葉が紹介されていました。その方面のことはまったく不案内の私ですが、筆者の鷲田清一さんの文に心が熱くなりました。「ルイ・ヴィトンのメンズデザイナーに就任したアフリカ系のデザイナーは、パリでの初ショーのあと、感極まり泣きながらランウェーを歩む自身の後ろ姿をインスタグラムに投稿し、こう記した。ショーでは冒頭、17人連続でアフリカ系モデルを起用した。テーマは『多様性』。床も虹色に彩った。『やったぜ』ではなく『きみにもできる』と書くところに、彼がこれまで辿ってきた苦難の道が偲ばれる」。彼の苦難がいかほどであったか、ルイ・ヴィトンのデザイナーがどれほどのことなのか何も知らない私ですが、ついに賞賛の高みの地に立ち獲たとき、「やったぜ」という歓喜の溢出ではなく、「きみにもできる」という、《人様》への温かく力強いrespectに満ちた言葉であったことに心打たれます。